

うで立たされていたが、開拓団出身の兵長で気の毒だった。

或る時熱が出て診察をうけさせて貰ったが体温三八度だったので女医は（ニイハチチヨロマン）ずるい兵隊だ。仕事をしたくないからだ（ニチエボー）差しつかえない、致し方なく作業に出れば（ブイストロラポータ）こんな状況は皆度々であった。

ソ連将校宿舎の使役に出た時など、マダムよりのパンやミルクなどのもてなしは良い思い出の一つです。

私の住んでいた北陵で民間人として最後の引揚時、小西街、満人部落に避難していた女、子供十五人位を迎えに行ってくれた、上等兵二名の方、本当に有難うございました。私の妻子もそこにいたのです。お陰様で妻と子供二人、無事コロ島より博多に上陸することが出来ました。

最後に、異国の地で亡くなられた戦友の皆々様の御冥福を心よりお祈り致します。

悪夢

高知県 東山 林

終戦までの経過

昭和十三年一月十日普通寺の山砲第十一連隊へ現役兵として入隊、昭和十三年十月十一師団と共に渡満、第四中隊、第六中隊第二大隊本部に所属し東満国境付近の警備に当たり、昭和二十年三月三十一日付けで独立混成第七十九旅団砲兵隊へ転属、人事係として牡丹江く石頭く安東と転進、昭和二十年八月十五日停戦となる。

終戦から入ソまでの間

武装解除

武器と名の付くものはすべて（手旗からラッパに至るまで）一か所に集めてソ連軍に提出し丸腰となる。但し将校は帯刀を許される。

妻との別れ

短刀を白布に包んで与え、万一はずかしめを受けるようなことが起こればこれで処置せよと指示して離別、鬼の目にも涙。

移動

馬匹約千頭をつれて安東から奉天まで約四百五十キロを徒歩行軍、十二、十三日かけて移動する。そして昭和二十年十一月入ソまでの間は奉天北陵収容所内で馬匹管理に従事する。

離隊逃亡

移動の間に数名の隊員が離隊逃亡し行方不明となる。また入ソ途中四平駅において中隊長が吾々隊員を貨車に残したまま離隊した。

一般邦人の惨状

東満国境付近にいた人々が大勢収容されており、婦人は皆頭を丸刈りにして軍服軍帽を着用していたが、乳呑み子をかかえ食糧も満足でないため毎日死亡者が続出し、一か月近くの間収容所の広場（北陵大学校庭）に墓標が林立し、その墓標のそばで事切れた婦人もいた。

入ソ後最初の抑留地ハラゲン

隊員の心理状態

敗戦の打撃に加えて、中隊長が逃亡したことにより、しばらくは無政府状態が続き（烏合の衆）、殊に将校に対する反感は強く、他中隊員に比し反軍思想が多く見受けられたが、私は、全員が無事で帰国するために、今、何を、どのように指導していくかということについて常に心を痛めた。しかし隊員の中には「あきらめ」という心理もはたらいて犠牲者の数も多かったのは、このような精神面のことも原因の一つではなかっただろうか。

衣、食、住

着たものは一年間そのまま着替えたことはなく、食糧といえば桃印マッチ小箱程度の大きさの黒パン一個と水のようなスープが飯盒のふたに一杯というのが一食分。（二食分一度に配分された時は皆が全部食っていた。しまっておくと他人に盗られたから）寝起きするところといえば自分達が急造の掘っ立て小屋で、暖をとるのはすべて枯木を拾い集め、照明には白燐の

皮を用いたので、朝起きた時は全員顔はススで真っ黒で誰だか判別ができない状態、また背には下敷きの雑草が凍り付きミノムシ状となっていた。

重労働

酷寒の中で耐えられない伐採というノルマを課せられた作業に加えて、シラミ、ダニ、南京虫、アメーバー性赤痢の発生という外敵の総攻撃を受け隊員全員が栄養失調となり、私自身平常六十五キロあった体重が四十キロまで減じた時もあった。

死亡者

十二月から翌二月上旬までは遺体を茶毘に付し遺骨を埋葬していたが、それ以降は遺体を全裸のまま雪を覆って葬った（土が凍って墓穴が掘れない）もの翌日の埋葬者を運んだ時、前日埋葬した人の遺体が飢狼の群に襲われて跡形もなくなっていたのは再度を超えた。生き地獄とはこのことだと感じながら、この実態はどのようなことがあっても遺族に伝えねばならぬという責任感から、細字の特種技術を利用して死亡者三十八名の名簿を作成し隠して持ち帰った。書いた物は

（印刷物も）一切持ち帰ることはできない状態で時々持ち物の検査もされ、書類などが見付かると、その本人は勿論のこと所属部隊全員が帰国不可となる、とどざされていたので、之を実行する時の気持ちは「命を的」という悲壮感があり、その隠し方については永い間公表する気持ちになれなかった。

キルガ收容所の思い出

部隊の改編

昭和二十一年六月〜昭和二十三年十一月の二年と五か月間、分遣派遣等の名目で機械工、大工左官、洋服仕立、自動車運転手、等々の特種技術者が離隊させられ、組織破壊が行われたし、先住抑留者と合併して主力はコムソモリスクへ移動したけれども、私は、二、三の者とこの地に残留した。

残務整理

たつ鳥あとを濁さずという諺があるが、主力が移動したあとに残された状態は目を覆いたくなる惨状で、遺骨箱は放置したまま、捕虜の七ツ道具も散乱しており、あと始末に苦勞したことが思い出される。特に死

亡者名簿については先に述べたとおりの要領で処理した。

残留部隊

旧部隊（独混七十九旅砲）の者二、三名とともに先住部隊の一部の者と一緒になった時、将校と名の付く人は軍医だけであり、あとは下士官、兵という形の残留部隊となり、この収容所の責任者が誰であったのか私の記憶は定かでないが、人事係の責から解放されたこともあり精神的には非常に柔な状態となり心のゆとりもできた。そして二年五か月間をこの地で過ごした。

労働

作業は伐採が主であり時期により草刈、建築、貨車積、等々命ぜられるままに作業に従事した。しかし、ノルマ未達遂組の援助作業や、ソ側ナチャニックに確認させる際、体積や容量をゴマカス方法で受け渡しをしていたから、ソ連側からは、ヒートリカマンジェルという烙印を押されていた。

民主化運動

約一年を越した頃から民主化運動が盛んになり、夕

食後、机の上に立たされ隊員から、あることないこと罵詈雑言をあびせられたことも二、三度あったが、これも芝居の一つと軽く受け流す心のゆとりを持っていたからあまり苦にはならなかった。しかし堅苦しく考える人の中には、日本人が日本人を苦しめたと表現し、アクチープに敵意をもつものも居た。

帰国（昭和二十三年十一月十八日舞鶴上陸朝嵐丸）

昭和十三年一月十日齡二十一歳で家を出てから十年と一か月振りに、隠し持ち帰った諸記録を整理し政府関係機関に報告や出頭しての事情説明、並びに遺族への通知や訪問しての事情説明等に数か月を要した。

振り返って己の人生を考えると

私の青春は『戦争と強制抑留』に明け暮れ、自由を持たない、縛られた牛馬や牧場内に羊などと同じ立場で生きた期間であったような感じがして淋しい。